

## 令和4年度お月見どろぼう調査報告書

# 四日市市内部地区におけるお月見どろぼうの实地調査 —類似行事としての亥の子・十日夜の調査と併せて—

令和5年3月30日

四日市市立博物館

天文係 北原里穂

### 1 はじめに

四日市市の一部地域には「お月見どろぼう」と呼ばれる風習が残っている（現状の実施地域については「令和3年12月お月見どろぼう実施状況調査」を参照）。この風習には類似したものが全国的にあり、これらの類似点を調べることで、お月見どろぼうの理解に役立てることを本調査の目的とする。

今年度は、内部地区における实地調査を行った。また、類似行事として、四日市市神前地区における「亥の子」、長野県佐久市上塚原地区における「十日夜」も实地調査を行った。今回の報告書では、これらの調査報告に合わせ、類似点についてまとめている。またそれぞれ、文献調査や現地での聞き取り調査も行い、概要としても記載した。

お月見どろぼうは近年の少子化の影響を受けて、実施地域が減少している。四日市市においてこの風習が廃れないよう、今回の調査結果を市民に共有したい。

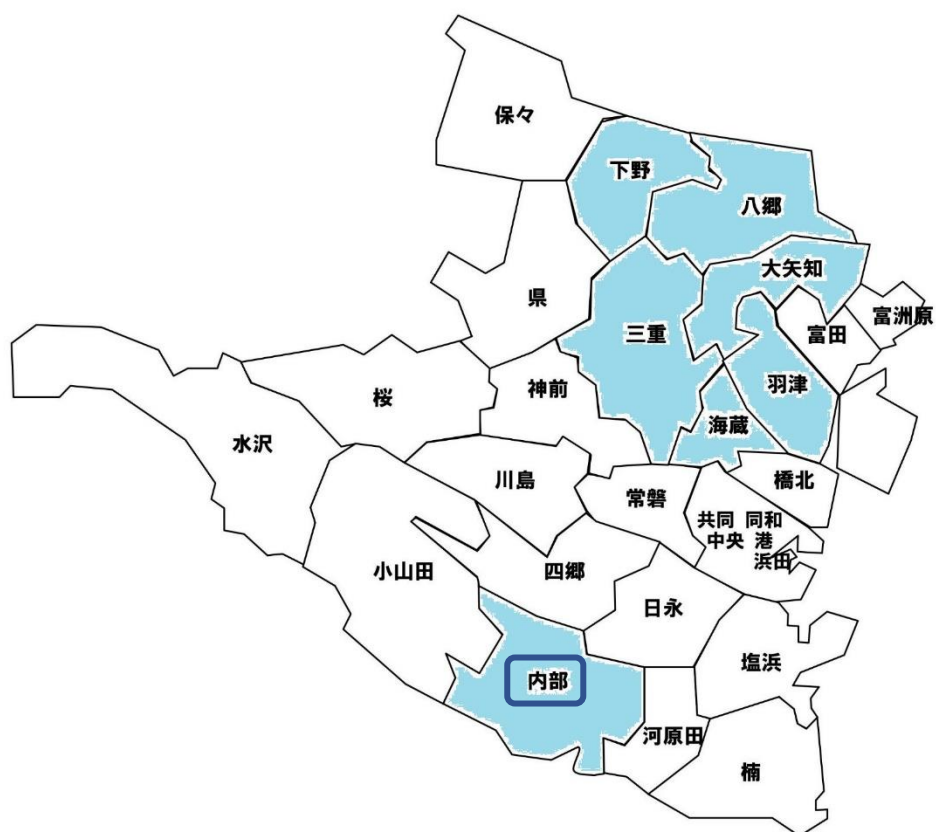
## 2 内部地区におけるお月見どろぼうの实地調査

### (1) 調査日時

令和4年9月10日(土)

### (2) 場所

四日市市内部地区 小古曽地区、采女地区



図：四日市市における2011年から2020年までにお月見どろぼうが実施された地域

※内部地区は他の実施地域と離れているようであるが、隣接する鈴鹿市の高岡台でも近年の実施報告がある。

### (3) お月見どろぼうの概要

お月見どろぼうとは、旧暦の8月15日、つまり中秋の名月の日に行われる行事で、一般的に幼児から小学校高学年までの子どもたちが町内の家々を回り、お餅やお菓子といったお供え物をいただく行事である。全国各地の農村部で行われていた

風習である（里山と言われる地域にあったもので、海岸部や商業地域などにはあまり例がない。）が、現在では全国でも一部地域での実施に留まっており、四日市市はそうした少ない実施地域のうちの一つである。

もともとは、お月見の日に限り子どもたちが月見団子を「泥棒」することが許されていた。団子が貴重な時代にはこのお供え物が里芋で代用※されたこともある。友だちと一緒に町内を回り、お供えしてある里芋を一軒につき一人一個、箸で突き刺して食べて回っていた。（※現在ではお月見のお供え物には月見団子が一般的だが、もともとは里芋などの農作物を供えていた。江戸時代に入り、これらの農作物が月見団子へと形を変えていった。そのため、代用というよりは、原点回帰といった方が近いかもしれない。）

現代ではこうしたお供え物がお菓子に形を変えて残っている。またこの風習は四日市市楠地区本郷では「いもめいげつ」、北一色では「十五夜のいもどろぼう」、小倉では「お月さんのいももらい」、他にも「いもおくれ」という人もいる。四日市市以外では、三重県三重郡朝日町で「いもぬすみ」、三重県員弁郡東員町で「いもばくり」、大阪府岸和田市で「だんごつき」、茨城県神栖市で「だんごどろぼう」と名前は地域によって異なる。

実施の歴史として、戦後は食糧不足で途絶えていたが、1960年代に復活。その後80年代ごろから、家の玄関先や門の前にお菓子を置いて、子どもたちがそれをもって歩くイベントに変わった。

お月見どろぼうの由来として伝えられているものには、次のようなものがある。

- ・昔、食べ物が少なかった時代に、他人への施しと地域の子どもたちを大切にするという精神が表れたもの
- ・子どもたちは月からの使者で、お供え物を持っていくことは、その家に「幸せ」を、もたらすとされていた（けがれを月に持って帰ってくれる）（当館天文ボランティア談）
- ・十五夜に子どもたちが農作物を盗むと豊作になるという言い伝え

当館の昭和のくらし展に合わせた学習投映用のプラネタリウム番組でもこの内容を取り扱っており、玄関にお供えしてある団子を箸で取ろうとしている子どもたちが描かれている。

#### （４） 内部地区におけるお月見どろぼうの実態

内部地区は、最も報告数が多かった八郷地区と同数の報告があった地域である。このうち、今年度は小古曽地区と采女地区の2地区が行っていた。どちらも小学生を中心として、友人や兄弟姉妹でグループを作り、玄関先にお菓子が供えてある家を探すため、町内を回っていた。

## ア 小古曾地区

### 【開始時間】

15時頃から子どもたちが町内を回り始めていた。18時前にはほとんど回り終わっており子どもたちの姿は減っていた。小古曾地区は子どもが回る地域がかなり広く、17時20分の調査時に会った小学校3年生の女子児童二人組は15時過ぎから回っているとの回答であった。この二人組はクラスの友人同士で回っていた。

### 【回るときのルールやスタイル】

小古曾地区では家々への声掛けはせず、静かにもらっていく。ただ、家の中の人と目が合った際などは一礼している様子が見られた。

また、徒歩で回っている子どもたちはリュックを前に持つのが定番のスタイルである。これはお菓子が入れやすいからとのことだった。



大きなリュックを前に背負う子どもたちの様子。

高学年は自転車も使って町内を回っていた。自転車の籠に入れたカバンと背中に背負うリュックの二つを持っている子どもがおり、どちらもみっちりとお菓子が詰まっていた。また、幼児も参加していたが、安全のため親と一緒に回っていた。

子どもたちに話を聞いたところ、お菓子が置いてある家を探して歩くが、まずは友人の家を回るそうである。交友関係が広がる高学年になると、確実に置いてあることがわかる友人の家が増えること、過去の経験から置いていた家の目星がつくこともあって、効率よく回ることができ、より多くのお菓子を入手できるとのことだった。

一度なくなっていたところも、後から補充される場合があるため同じところを複数回見ることもあるそうで、長時間の移動にも納得できた。暑い時間から回っているからか、子どもたちはみな水筒を持って回っていた。

### 【お菓子の種類】

家の前に置いてあるお菓子が入っている箱や籠には、「3個まで可」など家によって書いてあることが違う。お菓子の内容としてはスナック菓子が多かった。早い時間からスタートするからか、熱くなってしまうジュースや、溶けてしまう可能性のあるチョコレートや飴はあまり置いていなかった。



お菓子が入った箱の注意書き。ほとんどイラストが添えられていた。

### 【その他】

当事者以外の動きとして特徴的だったのは、車が徐行して道路を走っていることである。そこかしこに子どもたちがいることから、地域の人々もお月見どろぼうであることを認知しており、こうした行事に協力的であることがわかった。

## イ 采女地区

### 【開始時間】

18時から一斉にスタートした。19時ごろには月が昇ってきていたため、回っている際に子どもたちが月に気づいている様子も見られた。1時間ほど回ってから、各家庭に帰っていた。

### 【回るときのルールやスタイル】

高学年は友人と、低学年は姉兄についていくパターンが多く、近くの友人の家に集まり、そこからスタートするようである。中学校一年生も回っており、明確に中学生を禁止とするルールはない。自転車は禁止とのことだった。

持ち物として特徴的だったのは懐中電灯である。暗くなり始めた頃から開始するためみな持っているが、暗くなっても使っていないかった。使うのはお菓子が何個までという表示を見るときで、照らす係、読む係などに分かれて連携を取っていた。



懐中電灯で注意書きを照らし、確認している子どもたちの様子。

#### 【お菓子の種類】

お菓子の中で当たりなのはジュースで、炭酸抜きのものが人気だそうである。小古曽地区とは違い、開始時間が遅いからか、ジュースがしばしば見られた。スナック菓子の中ではポテトチップスも人気であった。



カバンの中に入ったお菓子。ジュースが複数本入っていた。

### 3 神前地区における亥の子の实地調査

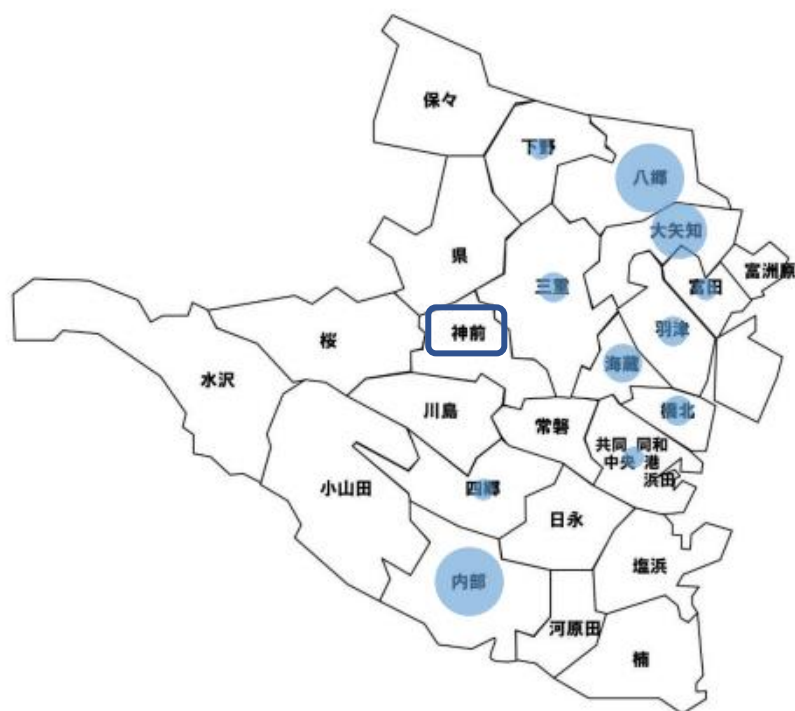
#### (1) 調査日時

令和4年11月19日(土)

#### (2) 場所

三重県四日市市神前地区 保曾井神社周辺

(三重県四日市市曾井町758)



図：四日市市におけるお月見どろぼう実施報告件数(年代問わず合算)

※神前地区は昨年の調査で、お月見どろぼうの実施報告がなかった地域である。

#### (3) 亥の子の概要

旧暦10月(亥の月)最初の亥の日に行われる子どもたちの行事。早いところでは11月3日、遅いところでも12月10日までに行われていたようだが、11月23日の勤労感謝の日に実施される地域が多いそうである。内容としては、子どもたちが家々を回りながら、「いのこ」と呼ばれる藁を縛ったもの(以下、ひらがなで書いたときはこの道具を指す)を、地面に叩きつける。このとき、亥の子唄と呼ばれる唄を歌う。

各家庭では、こうした子どもたちの労に感謝して祝儀を出す。最近はお金一般的なであるが、戦中、戦後しばらくは、お菓子や学用品などをいただくこともあった。祝儀は参加した子どもたちでわけるが、高学年ほど分配金が多いのは昔からの



伝統である。

曾井町では、いのこ保存会の子どもたちが、朝から各家庭をまわり、菊、南天などの秋の花を集めて「花飾りみこし（花みこし）」や「花飾り山車（花車）」と呼ばれるものを作る（花みこしは天秤棒を通して二人で吊るすもの、花車は台車に乗せられたもの）。夕方になると子どもたちは亥の子を持って氏神さまへ集まり、氏神さまへいのこを奉納して、花車を中心として各家庭を回る。往来は花みこしが主流であったが、現代は担ぎ手がいないため花車を使用している。



平成 30 年ごろに使用された花車（曾井町亥の子保存会提供）

つき始めは、「おおいのこ」と呼ばれる比較的大きないのこで景気をつける。おおいのこは真に竹などを入れることで、打ち鳴らしたときにいい音が出るよう、参加者みんなで作る。

いのこをつく際の亥の子唄は、曾井町では「いのこのもちはずいてもついてもおれませんが、もうひとつついたらおれすぎた、おまけにこまけにどっこいしょ」である。神前地区の中でも高角、寺方、尾平のいのこの歌は、おれませんがの後に「1つ、2つ、3つ…とお、とうとうおれました」と数え歌が入っている。亥の子唄は、地域によって文言が異なり、それぞれ各地域固有の唄が伝えられている。

亥の子は、今年収穫した粃を天日乾燥する場所の、地固めをする行事とも言われている。農家の庭先いっぱいには籠を掲げ、粃を干す場所を秋の収穫期間だけ設けるため、地面を固める必要があったためである。一説には、イノシシはたくさんの子どもを産むことから、来年の豊作を祈願して、いのこをつくとも言われている。



ただし地域によっては、亥の子は火事を防ぐための祈りの行事として行っていたという場所もある。北原の祖父母は岡山県津山市で育っているが、この地域では冬になる前に火事にならないようにと願いを込めながら地面をついていた、との話で合った。これは、「亥の子の日」に火を入れると火事にならないといわれており、「こたつ開き」をする習わしと共通点がある。(亥は陰陽五行説で火を制する水にあたるため、亥の月亥の日から火を使い始めると火事にならないとされた。)

#### 【楠町における亥の子】

四日市市楠町にも亥の子が行われていたという記録が残っている。現在50代の  
本市職員が子どもの頃には、楠町でも行われていたそうである。

楠町において、亥の子は刈り上げの行事である。「刈り上げ」とは稲刈りの終わった後で行う祝いを言うので、鎌揚げ・鎌納め・鎌祝いとも言い、収穫が終わったとき、田の神が田を去って山へ帰るときにあたったためである。

亥の子と刈り上げ儀礼との結びつきは不明だが、稲刈りや脱穀作業もすべて終わった12月の亥の日に、子ども組(昔は大人組と若者組など年齢集団があった)の者が田の神になって田や畑から集まって、稲藁で作った地突き束を持って、地面を突きながら部落の家々を訪れて、亥の日の餅をもらって帰る行事であった。そのときは、昔は餅を子どもたちに渡していたようだが、現在はお菓子である。地元には「亥の子の晩に重箱もろた 重箱あけたら ○○さんの金玉」というような俗謡が残っている。

### (4) 神前地区における亥の子の実態

#### ●準備

#### 【亥の子】

亥の子は行事それ自体の名前でもあるが、子どもたちが使用する道具の名前でもある。他地域では亥の子槌や藁でっぼう(次の十日夜と共通)と呼ぶこともある。昔は各家庭で作って持ってきていたが、近年は子どもたちが集まって作る場を設けている。現状は作れる大人が少ないこと、またコロナ禍で昨年と一昨年は亥の子が実施出来なかったため、作り方がわからない家庭がさらに増えたこと、わらや縄などの資材の調達も難しくなっていることなどが理由である。今回は朝から保曾井神社でレクチャーを行っていた。

まず、藁を柔らかくするため、槌などで叩いていく。ただし、槌の扱いは難しいため、子どもたちは藁を柔らかくするための専用の機械(藁打ち機)を使う。こうして柔らかくした藁は、紐で縛っていくが、今回お手本として製作していたおおいのこは、非常に大きく子どもだけでは縛るのが難しいことから、保護者が代理で縛っていた。来年以降は子どもたちだけでも作れるよう、しっかりと見学しておくこと、との声掛けがあった。



藁打ち機で藁を柔らかくする作業の様子



紐で藁を縛っていく様子を見学中

また、子どもたちが作るいのこのほか、途中で壊れてしまったときのために予備を保護者が作成していた。

#### 【練習】

境内で、二班に分かれて練習を行った。指導時に、音が良いということから、立って打ち込むスタイルを社協の会長さんから教えてもらっていたが、ほとんどの子はしゃがんで行っていた。神前地区のいのこには持ち手がないため、紐で縛っている本体の部分を手で持って地面を叩くようにするか、縛った紐の先を持ち、紐を使って大きく振り回しながら地面に打ち付けるスタイルかのどちらかであった。後者のスタイルは、おおいのこを持った大人がお手本として見せているものであるが、力のない低学年などは、本体部分を手で持って地面で叩いていた。

練習後には保曾井神社に全員でお参りし、豊作を祈った。



いのこを持って神社にお参りする子どもたち（宮本隆史氏（当館天文ボランティア）提供）

### ●亥の子

#### 【班分け】

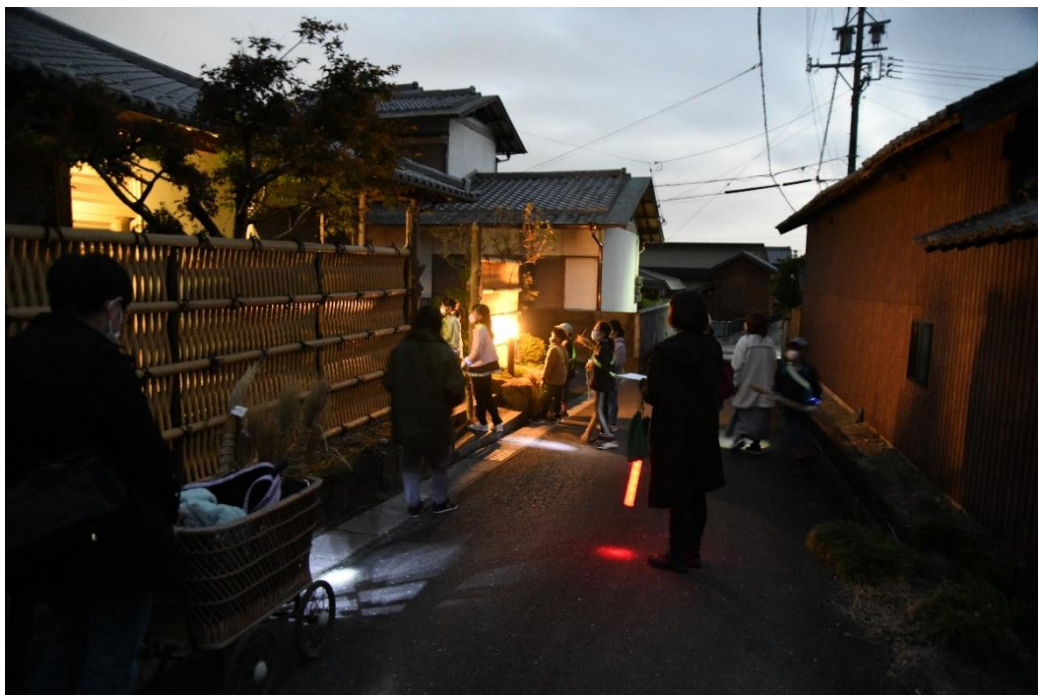
参加者は小学校1年生から小学校6年生までで、例年110件ほどの家を回っている。今回はコロナ禍のため、4班に分けて各班40件程度を回り、19:30頃に終了するようにした。（例年は2班に分かれて町内を回っている。その際は終了時刻が21:00頃となり、子どもたちがおなかをすかせるので、途中で公会所で軽食を摂ったそう。）

班分け時には、おおいのこを担当する高学年の担当者も確認した。今回は一つの班で二人の担当を決め、数件ごとに交代して行った。ただし、自分の家に対して行く場合は、学年にかかわらずその家の子がおおいのこの担当になるとのことだった。また昔は中学生（当時は国民学校高等科）が入ったときもあるそうで、高等科の生徒を含め、小学校3年生以上でなければ参加できなかった。

夜暗くなってからの移動となることから、各班に複数人の保護者がついており、回る際には訪問する家を地図で確認し、子どもたちに指示していた。

#### 【1件ごとの流れ】

訪問する家に近づいたら、おおいのこの担当者が太鼓を叩いて近づいたことを知らせる。訪問する家に着いたら、インターホンを鳴らして「亥の子です」や「亥の子に来ました」等のあいさつをする。家の人が出てきたら「このあたりでつかせてもらってもよいですか？」と聞き、家の前のスペースに並ぶ。



目的の家に着き、挨拶をしているところ。図左に籐の乳母車を持った親がいるが、本来はこれが花車である。今回は予備のいのこを入れている。(宮本隆史氏(当館天文ボランティア)提供)

並び終わったら、おおいこの担当者が「そおれ、そおれ、そおれ」と三回掛け声をかけながらいのこを打つ(傍点の位置でいのこで地面をつく)。それに続いて全員で亥の子唄を歌いながら、いのこを地面につく。

亥の子唄では次のとおり四拍ずついのこを地面につく。「いのこのもちは□ついてもついてもおれません(そおれ)もひとつついたらおれすぎた(そおれ)おまけにこまけにどっこいしょ」□の部分には休符があり、文の終わりには大人たちが「そおれ」という掛け声をかけていた。これによって、全体で四拍ずつになっている。

※この歌詞については「おまけにおまけに」派と「おまけにこまけに」派がいたが、正しいのは「おまけにこまけに」派である。ただ、子どもたちは練習の際に聞いた音で覚えている者も多いため、「おまけにおまけに」と歌うものもいるようである。





いのこをつく子どもたち。玄関前には家の人が出てきてくれている。(宮本隆史氏  
(当館天文ボランティア) 提供)

※家の前にスペースがない場合は道路で行うこともある。周囲を大人が囲み、安全を確保している。

#### 【終了後のご祝儀の分配】

家々を回り終わった後、全員で曾井町公会所(曾井町740)の前に集まっているのこをつき、写真撮影を行った。



公会所の前に集まり、全員でいのこをつく様子。一通り回って慣れてきたからか、高学年は立った姿勢から思いきりのこをつき、良い音が鳴っていた。(宮本隆史氏(当館天文ボランティア) 提供)





上がおおいのこ、下が多くの子どもたちが使っていた通常のいのこ。

おおいのこは公会所の前で全員でいのこをつく際、高学年の児童が代表して使用した。直径は10 cm程度で通常のいのこの倍程度の太さがある。ただし、おおいのこは本来はもっと太く、二人で持って使用していた。現代の参加者に合わせてスリム化しているとのことだった。

また、通常のいのこには輪がつけられているものがあり、移動する際に肩に掛けるために作られている。ただし、輪の部分をもって振り回すようにして地面を叩く児童もあり、便利に使っているようだった。長さはどちらも80 cm程度。

その後公会所の中で、各家庭をまわっていただいた祝儀を分配した。他に、次の画像にあるようにお菓子詰合せ、飲み物をいただいて解散した。



順にお菓子と祝儀をもらいに来る子どもたち。(宮本隆史氏 (当館天文ボランティア) 提供)

### 【花車】

今回は久しぶりの実施であったことから、通常のいのこの準備や練習が優先され、花車は作らなかった。ただし、これを知っていた家庭の方が、代わりにと玄関先にお花を置いてくれていた。子どもたちも見つけた際すぐに指をさし、「お花がある！」と喜んでいただけました。



玄関前に飾られていた花。(宮本隆史氏 (当館天文ボランティア) 提供)

#### 4 長野県佐久市上塚原地区における十日夜の实地調査

##### (1) 調査日時

令和4年11月13日(日)

##### (2) 場所

長野県佐久市上塚原地区 諏訪神社  
(長野県佐久市塚原1387)

##### (3) 十日夜概要

十日夜とは旧暦10月10日の夜に行う作神(さくがみ)送りの行事である。現在は月遅れの日付で行っているところが多い。

この頃には霜も降りるため、十日夜までに収穫を済ませるのが習わしだった。十日夜には一年間田畑を守ってくれた作神さまに感謝をささげて、その年穫れた新穀で餅をついて、依代の案山子に供え、また自分も食べた。稲などを守ってくれた神さまが山や天に帰る日だと伝えている。十日夜には庭先へ案山子を立て、白杵の餅を一斗杵か涅槃鉢へ入れて、月の差し込む軒下へ備えた。その際日本の大根、または二又大根を箸代わりに供えることになっていた。「十日夜は大根の年取り」とか「十日夜過ぎまで大根を野良へ置いてはいけない」とも言われていた。また「十日夜の餅を人に知られないように三軒から盗目が長者になる」とも言われていた。

十日夜の夜、子どもたちは夕食後村の辻や広場へ出て、藁でっぼうで地面をたたいて回った。その際歌ったのが次の歌だった。

「とおかんととおかんと おかんのわらでっぼう 朝きりそばに 昼だんご  
夕飯くってぶったたけ」

藁でっぼうをその年に穫れた新藁で作った。芯へ茗荷の茎を入れれば良い音がするとも言われていた。村の辻や広場へ集まって一氣勢をあげた子どもたちは、その後一団となって隣部落へ喧嘩をしに行くことが佐久地方における古いしきたりであった。

主に東日本(佐久市あたりから以東)で行われており、西日本では亥の子(四日市市では神前地区・楠地区にて実施例有)が対応する。現在、亥の子を行っている地域の東端はおそらく四日市市の神前地区であり、四日市市以東では十日夜となる。

長野県佐久市の上塚原地区にある諏訪神社では、近年は11月の第二日曜日に十日夜を行っている。十日夜は十五夜、十三夜に加え、三の月などとも呼ばれ、最後の月見とする地域もある。今回調査を行った地域では月見としての意味合いはほとんどなく、「案山子上げ」とも呼ばれていた。

他にも、もぐらを追う行事でもあった。

「十日夜十日夜 十日夜の藁でっぼう 十日夜の藁でっぼう 朝あわがゆに 昼だ  
んご 夕飯食ってぶったたけ」

「十日夜十日夜 十日夜の藁でっぼう 十日夜の藁でっぼう 朝そばきりに 昼だ  
んご 夕飯食ってぶったたけ」中佐都内でも、ことばが多少なりとも異なってい  
る。元気な子たちは下塚原や高瀬の方まで喧嘩に行っていた。

#### (4) 十日夜の実態

##### ●準備

##### 【餅つき】

行事当日の午前中から、諏訪神社にて塚原区の協議会の委員や子ども会の運営委  
員、PTAの役員らで餅つきを行っていた。餅は一度に三升ずつついている。白と  
杵を使用して自分たちでつくものと、自動餅つき器を使用してつくものとの全4回  
ついていた。白も直径90cm程度と非常に大きなもので、二人がかりで時間をかけ  
てついていた。コロナ禍以前は子どもたちが餅もついていた。



餅をつく際に使っていた白。白の下には藁が敷かれているが、これは神にささげる  
餅であるため。

餅にはつぶあんやきな粉がまぶされ、子どもたちや他の参加者向けに60個以上  
のパックに詰めていた。本来は藁でっぼうが終わった後に、神社の社務所（現在は  
公民館として使用されている）でこれらを食べてから帰るそうだが、今年は新型コ  
ロナウイルス感染症拡大防止のため、パックに詰めたものを持ち帰る形式としてい  
た。子どもたちに配られたパックにはつぶあんの餅が二つ、きな粉の餅が一つ入っ  
ていたが、運営に携わった大人向けにはさらに多くつぶあんの餅が三つ、きな粉の  
餅が二つに加え、たくあんが入っていた。





職員がいただいた餅。準備をした大人たちの昼ご飯にもなっていた。

### ●十日夜

#### 【祭壇】

大根やねぎ、りんごといった収穫物に加え、餅やお神酒、藁でっぼうや枡も奉獻されていた。お神酒は普段は深山桜（長野県佐久市塚原の古屋酒造店のもの）を使用している。

この地域では十日夜は案山子上げとも呼ばれる行事であり、案山子も奉獻されていた。案山子は男性と子どもを抱えた女性になっていた。今回のために作ったもので、普段から農家で使われていたものではない。



神社の前の祭壇。右に長老用の大きな藁でっぼうが並べられている。



### 【神事】

16時から神事が始まった。準備に携わった大人が集まり、地区の区長が挨拶をする。収穫に感謝をする行事であることやコロナ禍で縮小傾向ではあるが続けていきたいという旨を話されていた。

神事は諏訪神社の宮司が執り行った。祝詞の奏上の後、大人たちが順に榊を奉納した。神事の最中、子どもたちは大人の後ろで遊んでおり、終始興味のない様子であった。

### 【藁でっぼう】

16時30分から藁でっぼうを実施。神社の鳥居の前に並び、歌を歌いながら境内に入ってくる。鳥居から本殿の前の広場に来るまでに計3回歌っており、敬老会の人音頭を取りながら入場している。

歌は「とおかみや とおかみや ゆうめしくったらぶったたけ」という歌詞で、これを全員で歌い終わると、藁でっぼうを地面に何度も叩きつける。この流れを5回繰り返していた。歌を歌う際に音頭を取るのは長老と呼ばれる方で、中心で最も大きな藁でっぼうをついていた。大きさは1mをゆうに超えるのもので、こちらも長老ご本人が製作されたとのことだった。



大人も混ざり藁でっぼうを叩く様子。中心の白いジャンパーを着た白髪の男性（長老）が音頭を取る。

### 【参加人数】

同地区の小学生は60名ほどいるが、今回は40名以上（幼稚園年長から中学校1年生まで）の参加があった。神事開始以前に小雨が降っていたため、町内放送では「できるかわからないが、お餅だけでも貰いに来て」という旨が伝えられており、それらを聞いて少しずつ児童が集まってきていた。夕方の日が暮れだすころであることから、ほとんどが大人と一緒に来ており、こうした付き添いの大人も含めると80名以上の参加者がいた。

### ●インタビュー

#### 【藁でっぼうの作り方】

藁でっぼうはもともと各農家で作っていた。今年は11月3日（木・祝、旧暦十日夜当日）に藁でっぼう作りを実施した。敬老会の人を呼んで、子どもたちに教えてもらうという形式で、実際に自分で作っていたものを持ってきていた子が数人いた。一つの藁でっぼうを何年か繰り返し使っており、特に古くなったものは年明けにどんど焼きをする。

藁を一束まとめ、市販された藁のひも（ホームセンターなどで購入）で縛っていく。かなり力が必要で、子どもだけで行うのは難しい。しっかり縛りたいが、子どもが作った中にはかなり緩いものもある。今は大人が作って子どもに使わせていることがほとんどだそう。



作り手の異なる藁でっぼう。持ち手の部分は制作者によって異なり、強度が不安なものも使用中に破れてしまっているものもあった。

#### 【今回とコロナ以前との比較】

一昨年は中止、昨年は縮小して実施した。ここ数年はコロナ禍のため、区の役員がメインで運営しており、他の団体にはあまり声をかけていない。全行程行うことが出来たのは3年前で、昨年は藁でっぼうのみ前後半に班分けして実施した。今年は全員一緒に行った。

#### 【その他】

終始小雨が降っていたが、神事から藁でっぼうまでの全工程を見ることが出来た。子どもたちは神事が開始した時点では10人程度しか集まっておらず不安もあったが、藁でっぼうが始まる頃には40人以上が集まっており、上塚原地区の子どもたちが楽しみにしていたことがよくわかった。

十日夜の歌は短い歌であるためか、初めて参加する幼児もすぐに覚えることが出来たようで、大きな声で歌っており非常に楽しそうであった。コロナ禍で縮小傾向であることや少子化で参加することの数が減っていることなど、不安要素も多数あるようだが、続けていくための地域の努力が感じられた。

## 5 類似点

全行事に共通していたのは、メインとなる参加者が子どもであり、地域の大人がそれに協力していたことである。また、どの実施地域も現在は閑静な住宅街であり、昔は里山地域であった。

次に、共通ではないが類似していた点をまとめる。

	お月見どろぼう	亥の子	十日夜
実施時期	旧暦8月15日	旧暦10月亥の日	旧暦10月10日
実施内容	子どもたちが家々を回って、お菓子をもろう	子どもたちが家々を回って、いのこをつく	子どもたちが神社の境内で、藁でっぼうをつく
上記の内容の意味	十五夜に子どもたちが農作物を盗むと豊作になる	来年の豊作を祈る	来年の豊作を祈る
子どもたちがもらえるもの	お供え物としてのお菓子（過去はお餅）	祝儀とお菓子（神前地区） 亥の日の餅（楠地区）	お餅

それぞれ旧暦の日付で実施するのが原則であり、収穫を祝う行事としての意味合いがはっきりしていると考えられる。ただし、亥の子や十日夜など現代ではなかなかわかりづらい旧暦の日付の行事は、地域によって都合の良い日選ばれていた。

また実施内容として、子どもたちが家々を回る点はお月見どろぼうと亥の子で類似している。ただし、十日夜でも家々を回る地域がある。また、いのこや藁でっぼうといった道具を地面に叩きつける点は亥の子と十日夜で類似している。

どの行事でも子どもたちはお礼に様々なものをもらっているが、お菓子や現金、お餅など、共通していたものがある。

## 6 おわりに

今回調査を行った行事以外にも、日本各地には類似した行事が数多く存在する。例えば、京都の地蔵盆（地蔵会）や九州のもぐらうち、北海道のろうそくもらいなど、各地域にあると言っても過言ではない。今後はこうした類似行事の分布とそれぞれの行事についての文献調査を積極的に行っていきたい。

また、こうした類似行事はあまり地域の重なりがないと考えているが、四日市市楠地区のように例外も存在する（楠地区ではお月見どろぼう、亥の子が同時期に行われていた）。こうした行事や風習の分布を調べていく中で、そのルーツについても解析していけば、四日市市において、現代でもお月見どろぼうが残っている特殊な郷土性が見えてくるのではないだろうか。

## 7 参考文献

- ・中日新聞 令和3年9月4日（土） 暮らしの作文投書
- ・きらく会 発10号資料 令和3年10月
- ・郷土史「ふるさと神前」
- ・早稲田神社ホームページ 11月の神事 亥の子祭りについてのご紹介！  
(<https://wasedajinja.jp/2017/11/03/post-426/>)